

リティのある大国の存在を意識して、日本の気象学を考える見方が一つだろう。また外国で出来なくて日本で出来るという、日本の特技を生かすことですね。例えば、観測にしても、モデルにしても、アメリカでやったということをふまえて逆にこちらの予定を組むことはあり得るだろう」

**F** 「はっきりした形ではないが、皆が一人一人考えていることでしょう」

**C** 「オリジナリティで勝負しよう方針を立てて、世界で誰もやっていないことばかりをやる。そのうちの何人かが成功しても、世界の気象学に貢献するともいえるでしょう」

**B** 「計算機が使えないとか、研究体制が悪いとかいう現状ばかりを考えるからいけない。計算機がどうしてもいるんだとか、体制はこうしなければならぬということを出してこないから、日本の特質が出てこないのだ」

**A** 「だし方は難かしいだろう。だから今まで安全コースばかりやってきたわけですね」

**I** 「例えば10年以上前数値予報を日本で実際にははじめたころは外国でやらないことを狙ってやられたと聞きます。それで成功したわけですが、ある段階で基礎的なものが欠けていたのでマイナスになったという話も聞いています。基礎的なものというのは数値予報のバックグラウンドとなるフィジカルベースから始まり、地衡風、プリミティブに移る理論のことでこれが日本に定着していたかということです」

**A** 「今から考えると悪くいえば個性が出たという感じですね。70年代はそうではなくて、ベースを固めていくということでしょう」

**I** 「ひとりの大学院の教育を考えてみると、ベース抜きに何かやれという雰囲気があった。今はその反動として割合にベースをちゃんとやるという風になっているのでその中でこのびのびと個性が出れば本物といえるでしょう」

**E** 「私は数値予報についてはよく知らないけれど、確か55年頃に数値予報グループが相当の意気込みで、かなり組織的に数値予報のテーマに取込んで行った。そしてその頃何でも集中的にやっていた時代に最大の能力を発揮していた。今はそれがルーチン化されて特に目立たなくなりましたが、日本の気象学会にも、そういういい前例があるのです」

**A** 「日本では伝統という流れというか、基礎をやるというのが少ないような気がします」

**I** 「やっぱり再生産をしてゆくベースを固めてゆく作業と、その中から頭を出して行くものと両方が必要なのだと思います」

**A** 「有能な方々が多かったのである程度のロケットのように打上ったのだと思います」

**I** 「今から考えると一人一人は非常に良い仕事をされたが、ベースとしての力学としては、いいかげんの議論をしていたわけです。理屈抜きの以心伝心的な方法にもやっぱり限界があるので、やはり基礎を固めることは大切です」

**司会** 「今夜は、どうも貴重なお話を長時間にわたってありがとうございました」

この座談会の原稿整理にあたっては、内田紘子、月田秀夫、鈴木徹、大島（以上気象研究所）、松下真（気象庁予報部）の各氏に多大の労をわずらわした。記して感謝の意を表します。  
(編集委員会)

---

正誤表 Vol. 16, No. 12 の口絵写真および「故 正野教授を悼む」の中で、故 正野重方教授(1901~1969)は(1911~1969)の誤り。また文中上から8行目、「興味は気象台にうつり」は「気象学」の誤り。謹んで訂正致します。